荒川 麻里（筑波大学／教育制度学）

レディバード・レディバード

（原題： Ladybird Ladybird）

© 2010 KADOKAWA

- 種別：DVD（映画）
- 監督：ケン・ローチ
- 製作年：1994 年
- 製作国：イギリス
- 発売元／販売元：株式会社 KADOKAWA 角川書店
- 時間：本編 102 分
- 音声：英語
- 字幕：日本語（字幕翻訳：齋藤敦子）
- 価格：￥1,800＋税

あらすじ

主人公マギーは、留守中に起きた火事がきっかけとなり母親失格の烙印を押され、4 人の子どもを養子に出されてしまう。その後、パラグアイ出身のホルヘと出会い、マギーは子どもを授かる。しかし突然、社会福祉員に子どもを奪われる。次の子どもは産院を退院する前に連れ去られ、面会さえも認められていない。驚くべき事に、これは実話である。社会問題を指摘し続けるケン･ローチ監督が､実話を基に映画化した作品。

Chapter
1. ジョージとの出会い／1’08
2. 家庭内暴力／10’04
3. 悲劇のはじまり／5’00
4. 僕は政治亡命者／5’00
5. 君のために僕がいる／6’52
6. 隣人／7’52
7. ゾエ／9’36
8. 私の子を返して／7’49
9. 偽証・裏切りの判決／7’32
10. 繰り返される悲劇／9’45
11. ののしり合う二人／6’52
12. 変らぬ愛情／1’58

シーン再現

裁判官： これは困難な判決でした。母親には同情するが、子へのリスクは見過ごせない。最初の 4 人の子の例を調査した結果、大きな確信を得ました。この母親は子供に安定した環境を与えられない。先程でも証明されたが、彼女は教養程度が低く自制心が欠如している。何度も相手を変え、4 人の子と本件の子を暴力の危険にさらした。彼女の暴力的性格は、自分自身の努力さえも無駄にし、原告の社会福祉局からの援助も拒絶した。改善の意思がないのだ。アレヤノ氏（ホルヘ）が劇的に生活を改善したそうだが、その証拠は見られないし、（マギーが暴れはじめる）信頼性が感じられない。将来、改心する可能性も感じられない。デイヴィス弁護士、原告の主張どおり、社会福祉局の養育権を認める。（マギー、泣き崩れる）被告の面会を禁止し、養子縁組を目的とする里親探しを命ずる。

※ 括弧内は引用者が補った

教育学の視点から

幸せの他者決定というジレンマ

ショーン、ミッキー、セレーナ、メアリー、ゾエ…主人公マギーが失った子どもたちの名前である。6人目は、名前を付ける前に「保護」された。イギリスでは、1989年に「児童法」(The Children Act)が制定され、「親責任」(parental responsibility)の概念に基づく子どもの保護強化が目指された。その頃、子どもの虐待死事件が相次ぎ(Jasmine Beckford:1985, Kimberley Carlisle:1987)、また同時に性的虐待の疑いによる121件の子どもの一斉保護事件も発生していた(Cleveland child abuse scandal:1987)。子どもの保護と親子関係への過度の介入とが、同時に問題とされていたのであった。

「家のため」、「親のため」、「子のため」という親子法の発展図式で言えば、1989年の「児童法」は「子のため」への転換に位置づけられる(川田昇『イギリス親権法史』一粒社、1997年、1頁)。同法1条は、「子の福祉」(child's welfare)を最優先事項とし、3項では保護命令等を出す場合の裁判所の考慮要件として、次の7つを定めている。①子の意思と感情(年齢や理解に応じて)、②子の物理的・精神的・教育的ニーズ、③状況の変化が子に与える影響、④子の年齢・性別・背景・その他の特徴、⑤子が現在受けているか、受ける可能性のある危害、⑥両親および関係者が子のニーズを満たす能力、⑦この法律の手続きにおける裁判所の権限の範囲(参考:東和敏『イギリス家族法と子の保護』国際書院、1996年、34頁)。

「シーン再現」の判決も、上の諸点に対応していることがわかる。母親としての能力無しと断定されたマギーは、ダメな母親だったのだろうか。長男ショーンを見舞った彼女は、養親に対し、食べ物にケチャップをかけないよう懇願する。「添加物とか身体に悪い物が山ほど入ってるわ」と説得するほど、子どもの健康と安全に敏感な母親なのだ。福祉局の提供する生活環境は、そんな彼女の目には教育上不適切と映り、援助を拒絶する結果となった。親がその信念に基き子どもを教育するための条件整備は、親支援の課題だと言える。

本作品では、子どもを奪われた親の強烈な悲しみと怒り、そして絶望に焦点が当てられた。そのため、親との別離により子どもが一生抱え続ける悩みや苦しみについては、視聴者の想像に任されている。親子関係への支援と介入は、時として子どもの幸せを一方的に断定することになりかねない。子どもの幸せを尊重しようとする時、その子どもが生きてきた親子関係を尊重するという当たり前の配慮は、決して軽視されてはならない。

Information

本作品のタイトルは、下のマザー・グースの詩から来ている。子どもが指の先からテントウムシを飛ばす前に、呪文のようにつぶやく唄だという。マザー・グースの収集で知られるオーピー夫妻は、戦時下で互いがこの唄をふと口ずさんだことから伝承の起源について考えはじめたと言われる(鈴木紘治『マザー・グースの謎を解く:伝承童謡の詩学』コールサック社、2012年、126-131頁)。〈出典〉訳:谷川俊太郎/絵:和田誠/監修:平野敬一『マザー・グース 2』講談社、1984年、51頁、「解説」20-21頁。

Ladybird, Ladybird, Fly away home,	てんとうむし てんとうむし とんでおかえり
Your house is on fire And your children all gone;	おうちが かじだ こどもたちは みなにげた
All except one And that s little Ann	あとにのこるは ひとりきり ちっちゃなアンが ひとりきり
And she has crept under The warming pan.	アンはこたつに はいこんだ